

# 北海道の酪農・畜産をめぐる情勢

令和6年2月

北海道農政部生産振興局畜産振興課

# 目次

I	酪農・畜産の位置付け	1
II	酪農	
1	北海道における酪農の位置付け	2
2	乳用牛飼養状況と生乳生産量の推移	3
3	牛乳の生産コスト	4
4	個体販売価格の推移	5
5	酪農の飼養形態	6
6	施設整備(フリートール・ミルクングパーラー)の状況	7
7	酪農経営における労働時間と省力化機械(搾乳ロボット)の導入状況	8
8	酪農の地域営農支援システムの形成	9
9	酪農ヘルパー	10
10	乳用牛の改良	11

11	乳牛の分娩間隔と除籍産次の推移	12
12	酪農の担い手の育成・確保	13
13	畜産クラスター事業の実施状況	14
14	牛乳・乳製品の需給構造	15
15	生乳等の需給の推移	16
16	乳価の推移	17
17	酪農の経営安定対策	18
18	改正畜産経営安定法における生乳流通	19
19	道内の乳業工場	20
20	生乳の道外移出量及び産地パックの推移	21

## III 肉用牛

# 目次

1	北海道における肉用牛の位置付け	2 2
2	肉用牛の飼養動向	2 3
3	肉用牛の飼養状態別飼養戸数	2 4
4	肉用牛の経営状況	2 5
5	牛肉の需給動向	2 6
6	肉用子牛の取引動向	2 7
7	牛枝肉価格の推移	2 8
8	肉用牛の経営安定対策	2 9
9	経済連携協定等の牛肉の関税率	3 0
1 0	食肉センター等の設置状況	3 1

## IV 中小家畜・軽種馬

1	北海道における豚の位置付け	3 2
2	豚の飼養動向	3 3
3	豚肉の需給動向	3 4
4	北海道における鶏の位置付け	3 5
5	鶏の飼養動向(採卵鶏及びブロイラー(肉用若鶏))	3 6
6	めん羊の飼養動向	3 7
7	軽種馬・その他馬の状況	3 8

## V 飼料作物

1	飼料作物の生産状況	3 9
2	自給飼料の増産対策	4 0
3	北海道の草地更新・整備状況	4 1
4	地域別の草地更新・整備率	4 2
5	配合飼料の状況	4 3

VI	畜産環境	4 4
----	------	-----

# 目次

## VII 家畜衛生

- |   |                          |     |
|---|--------------------------|-----|
| 1 | 家畜衛生対策の推進 . . . . .      | 4 5 |
| 2 | 海外悪性伝染病の侵入防止対策 . . . . . | 4 6 |

## VIII 酪農・肉用牛生産近代化計画

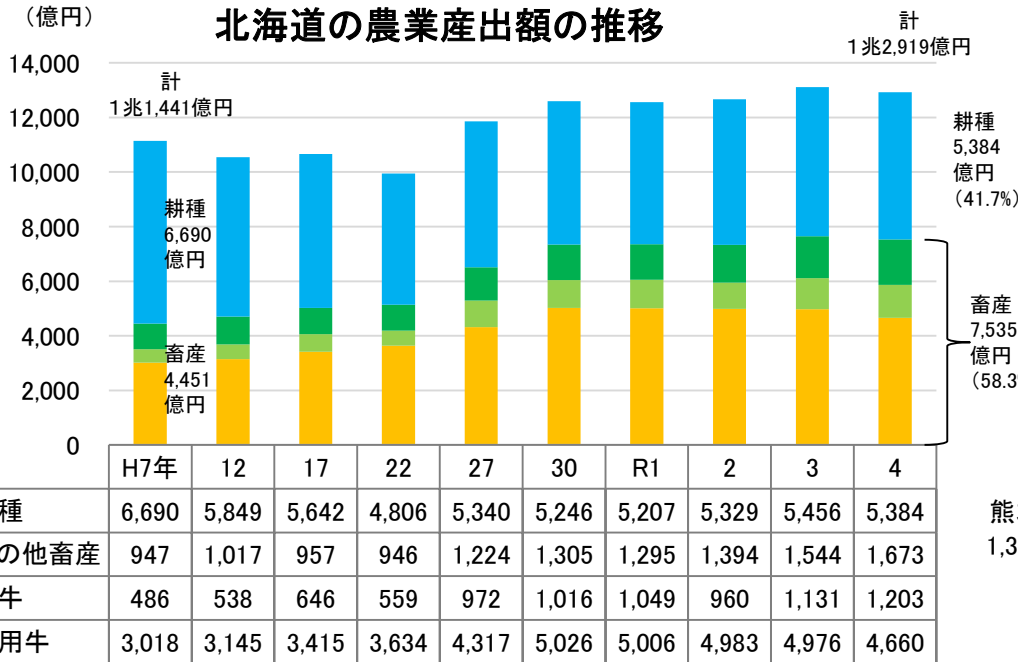
- |   |  |     |
|---|--|-----|
| 1 | 第8次北海道酪農・肉用牛生産近代化計画のポイント . . . . .             | 4 7 |
| 2 | 第8次北海道酪農・肉用牛生産近代化計画の生産数量目標(令和3年3月策定) . . . . . | 4 8 |

(参考)農林水産省「畜産統計」の統計手法変更について(令和2年～)  
乳用牛及び肉用牛について、従来実施してきた飼養者を対象とした統計調査が廃止され、新たに牛個体識別全国データベース、乳用牛群能力検定成績及び畜産統計調査(過去)の情報に基づく統計手法に変更。

# I 酪農・畜産の位置付け

- 令和4年(2022年)の北海道の農業産出額は1兆2,919億円で全国(9兆147億円)の14.3%。
- このうち畜産の産出額は7,535億円と全体の58.3%を占め、乳業・食品加工業や生産資材産業など裾野の広い関連産業とともに地域の雇用や経済を支える重要な基幹産業。
- 全国の畜産の農業産出額(3兆4,673億円)のうち本道の占める割合は21.7%で、国内最大の生産地。このうち乳用牛が4,660億円と畜産全体の61.8%。

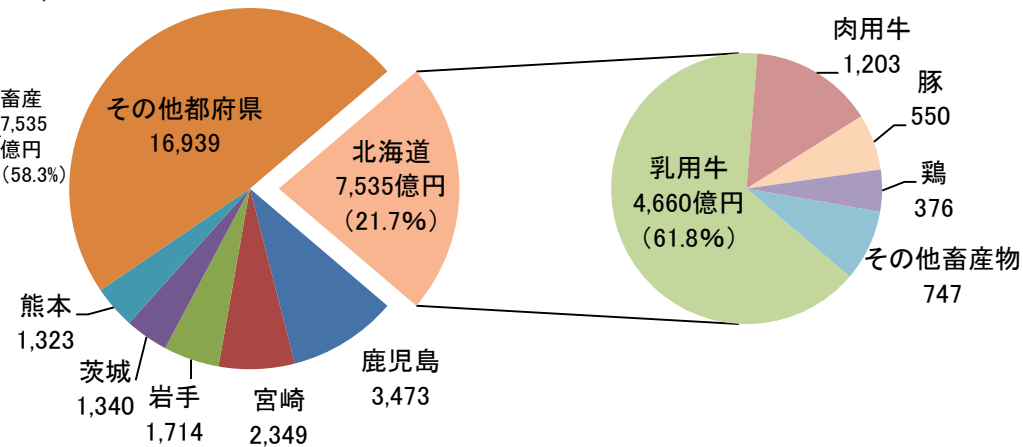
### 北海道の農業産出額の推移



### 全国、北海道の畜産の農業産出額の内訳(令和4年) [単位:億円]

全国:3兆4,673億円

北海道:7,535億円



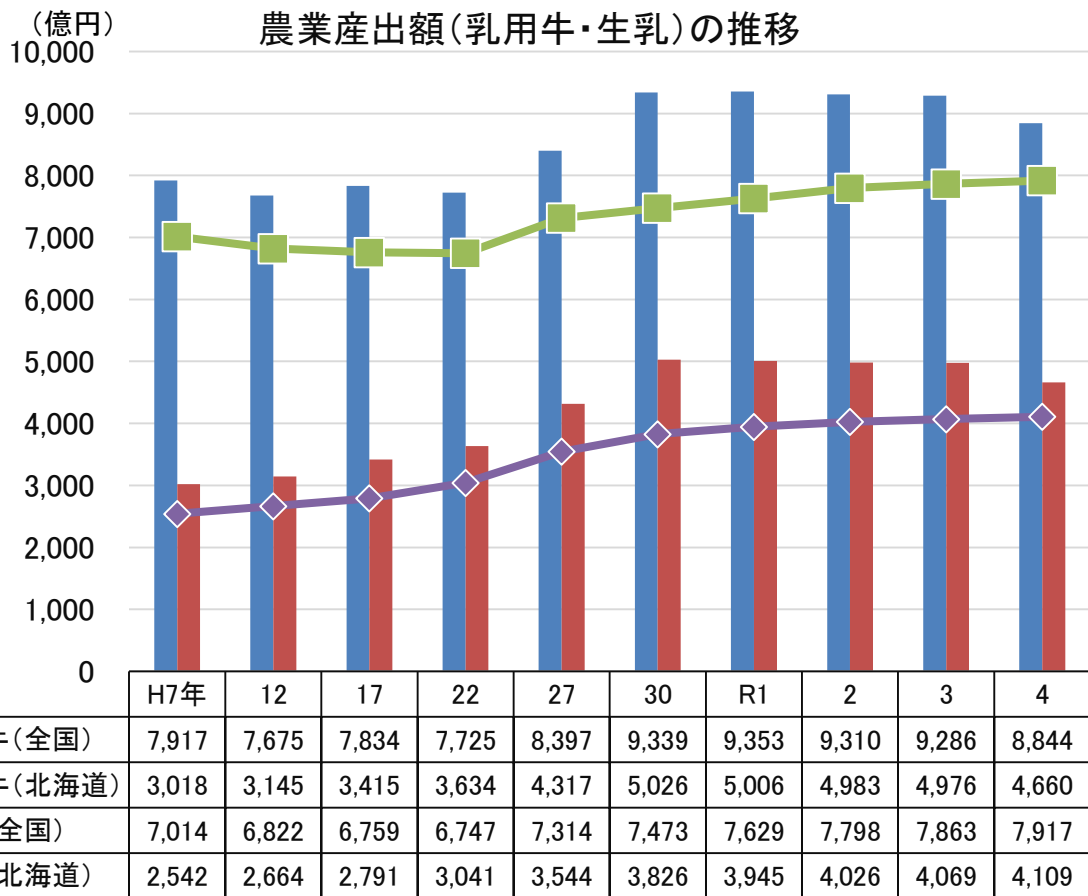
資料:農林水産省「生産農業所得統計」  
 ※単位未満で四捨五入しているため、内訳と合計は必ずしも一致しない。

資料:農林水産省「生産農業所得統計」  
 ※単位未満で四捨五入しているため、内訳と合計は必ずしも一致しない。

## Ⅱ 酪農

### 1 北海道における酪農の位置付け

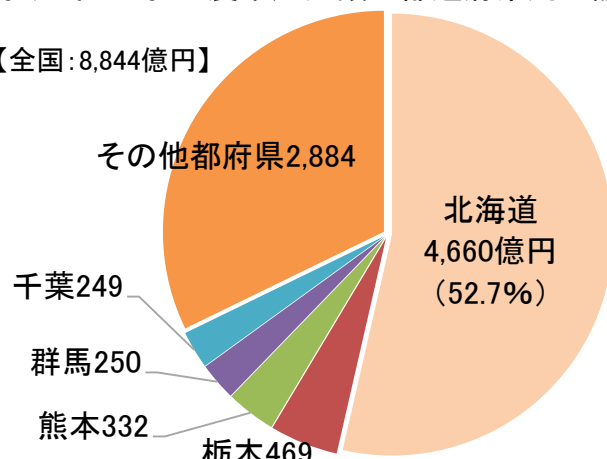
- 令和4年(2022年)の全国の乳用牛(乳用牛・生乳)農業産出額は8,844億円、このうち北海道の割合は52.7%(4,660億円)であり、いずれも前年からやや減少。
- このうち北海道の生乳の農業産出額は、4,109億円と全国の51.9%。全国の増加率100.7%に対して、北海道は101.0%。



乳用牛・生乳の農業産出額の都道府県別内訳(令和4年)

【全国:8,844億円】

〔単位:億円〕

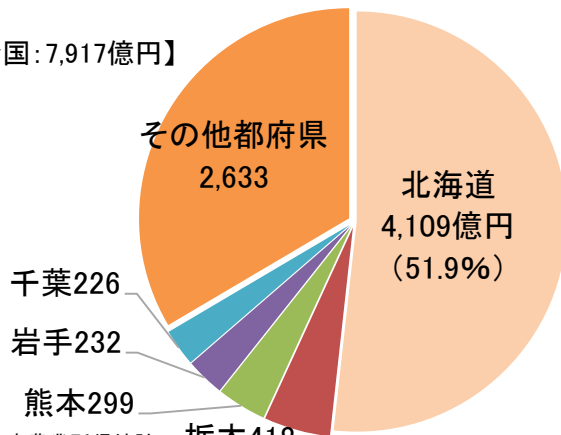


資料:農林水産省「生産農業所得統計」

生農業産出額の都道府県別生乳の内訳(令和4年)

【全国:7,917億円】

〔単位:億円〕



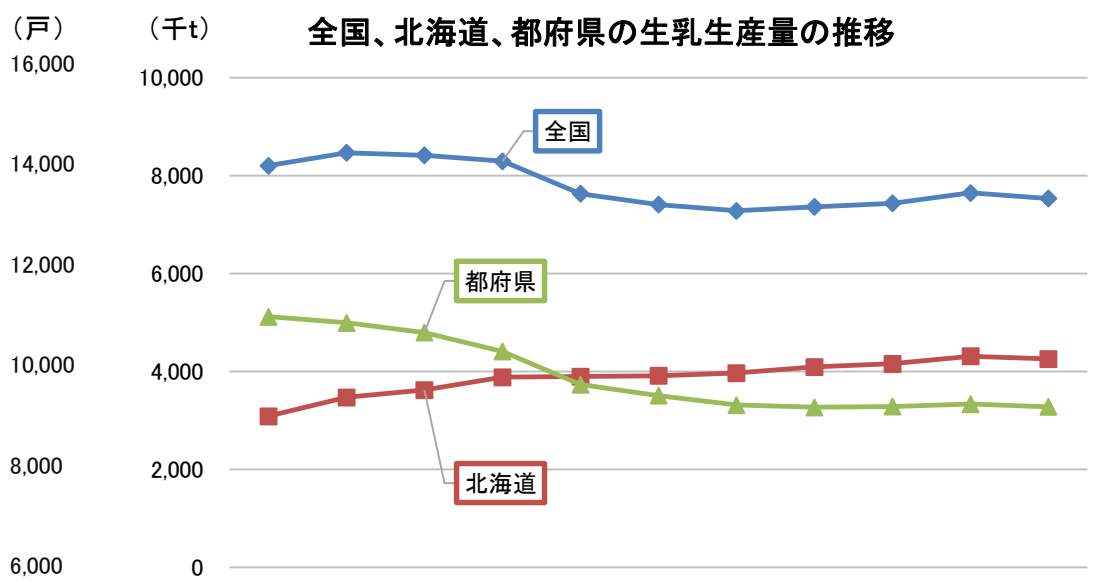
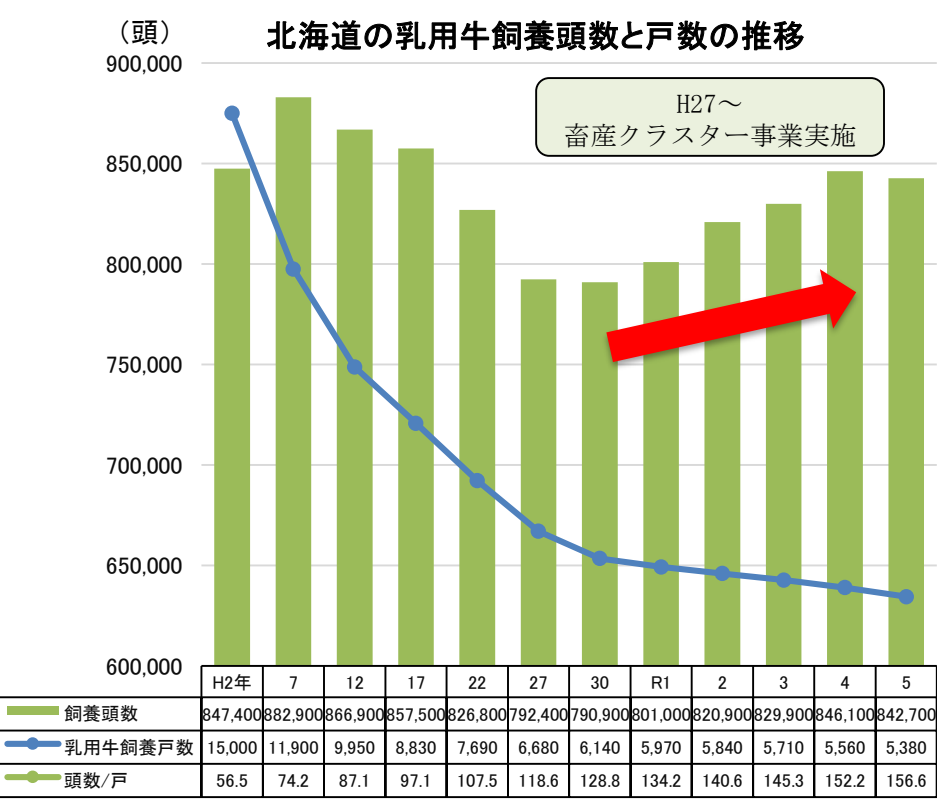
資料:農林水産省「生産農業所得統計」

資料:農林水産省「生産農業所得統計」

※単位未満で四捨五入しているため、内訳と合計は必ずしも一致しない。

# 2 乳用牛飼養状況と生乳生産量の推移

- 乳用牛の飼養戸数は、令和5年(2023年)2月1日現在、前年比3.2%減の5,380戸(平成2年対比35.9%)。
- 飼養頭数は、平成30年(2018年)以降増加傾向にあったが、生乳の生産抑制の影響もあり、前年比0.4%減の842,700頭(平成2年対比99.4%)。1戸当たり飼養頭数は156.6頭(平成2年対比277.2%)。
- 令和4年度(2022年度)の生乳生産量は、生乳需給が緩和し、生産者団体が自主的に生乳の生産抑制に取り組んだことにより、前年度比98.7%の425万トン。
- 北海道の生乳生産量の全国に占める割合は年々増加し、平成22年度(2010年度)には過半を超え、令和4年度(2022年度)は56.5%。



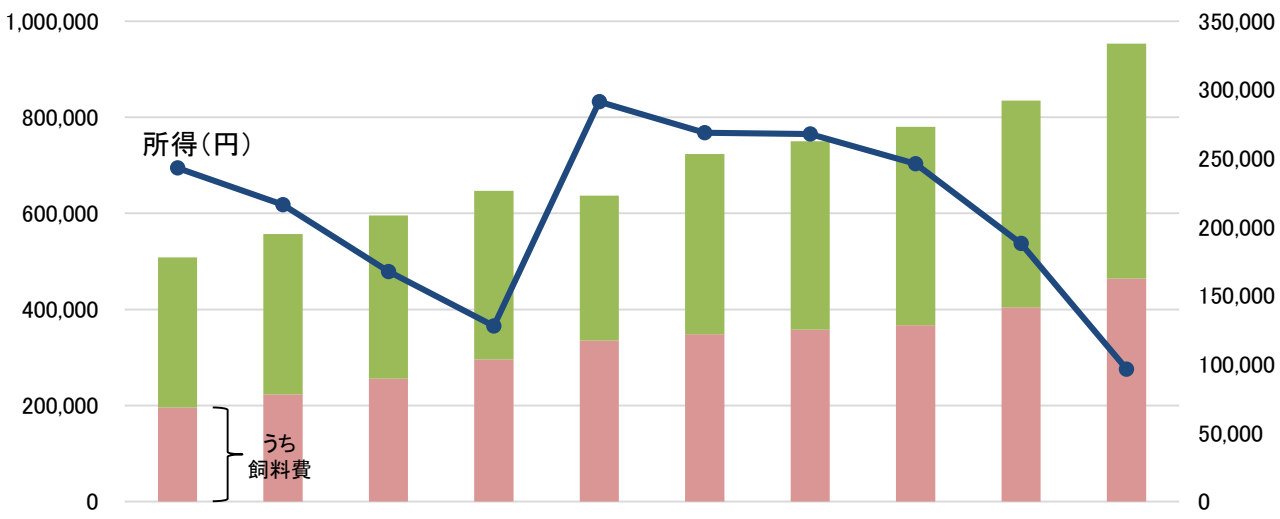
資料: 農林水産省「畜産統計」

資料: 農林水産省「牛乳乳製品統計」、北海道農政部調べ

# 3 牛乳の生産コスト

- 牛乳生産費(搾乳牛1頭当たりの全算入生産費)は、飼料費や光熱費及び動力費等の上昇により、令和4年(2022年)は、前年比118,300円増の952,886円。
- 所得は前年比91,505円減の96,607円。
- 費用(生乳100kg当たり、9,481円)のうち、飼料費(4,378円)をはじめ、乳牛償却費、農機具費など物財費で85%を占める。

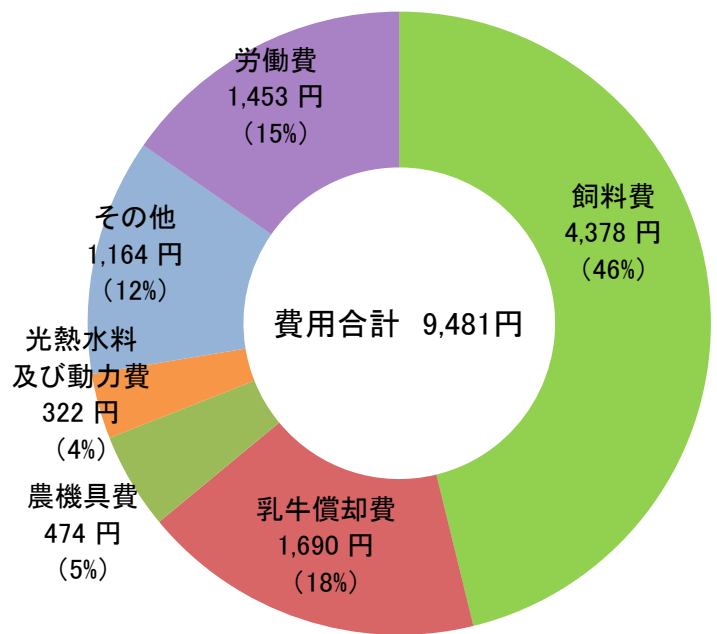
全算入生産費(円) 北海道における牛乳生産費と所得の推移(搾乳牛1頭当たり)



	H7年度	12	17	22	27	30	R1年	2	3	4
全算入生産費	508,347	556,789	595,232	646,478	636,705	723,629	750,257	779,887	834,586	952,886
うち飼料費注1	196,186	223,178	256,252	295,997	335,074	348,342	357,953	367,148	404,745	464,669
所得注2	243,096	216,260	167,667	128,028	291,301	268,726	267,855	246,178	188,112	96,607

資料:農林水産省「畜産物生産費統計」  
 注1:調査期間について、平成30年度までは4月から翌年3月までとしていたが、令和元年からは1月から12月に変更となった。  
 注2:所得については、「畜産物生産費統計」を参考に、畜産振興課で算出。

令和4年牛乳生産費(生乳100kg当たり)の内訳  
(乳脂肪分3.5%換算乳量)



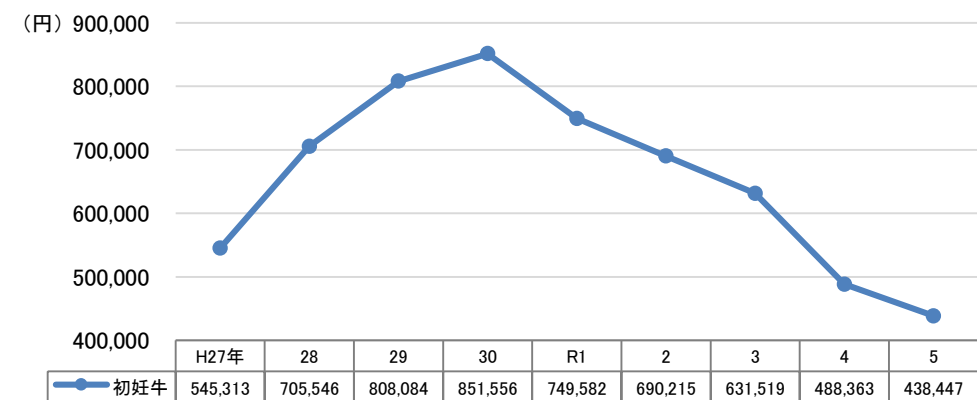
資料:農林水産省「畜産物生産費統計」



# 4 個体販売価格の推移

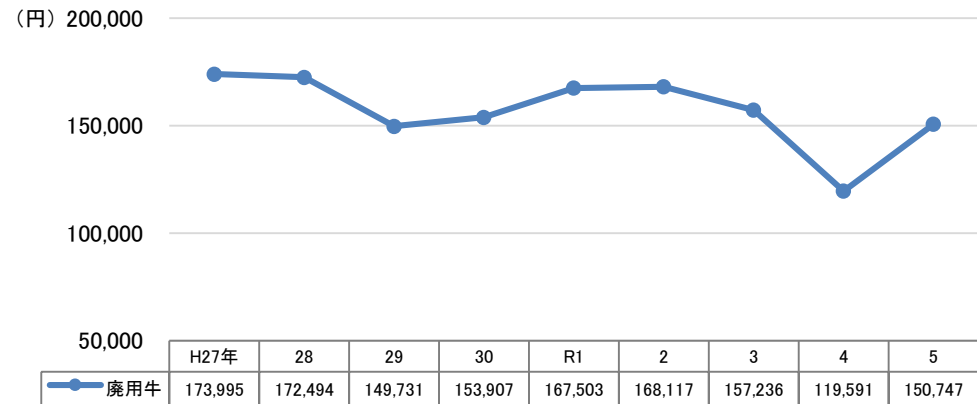
- 初妊牛販売価格は平成27年(2015年)から上昇し、平成30年(2018年)に最高値となった。令和元年(2019年)以降、低下し、令和5年(2023年)は平成27年(2015年)以降、最低の438,447円。
- 廃用牛販売価格は平成27年(2015年)以降14万円～17万円台で推移。令和4年(2022年)は大きく低下したが、令和5年(2023年)は150,747円まで回復。
- 初生牛販売価格は黒毛和牛・ホルスタイン・交雑種ともに平成28年(2016年)までは上昇、その後横ばいが続いたが、令和2年(2020年)以降は低下傾向で推移。

■初妊牛販売価格の推移



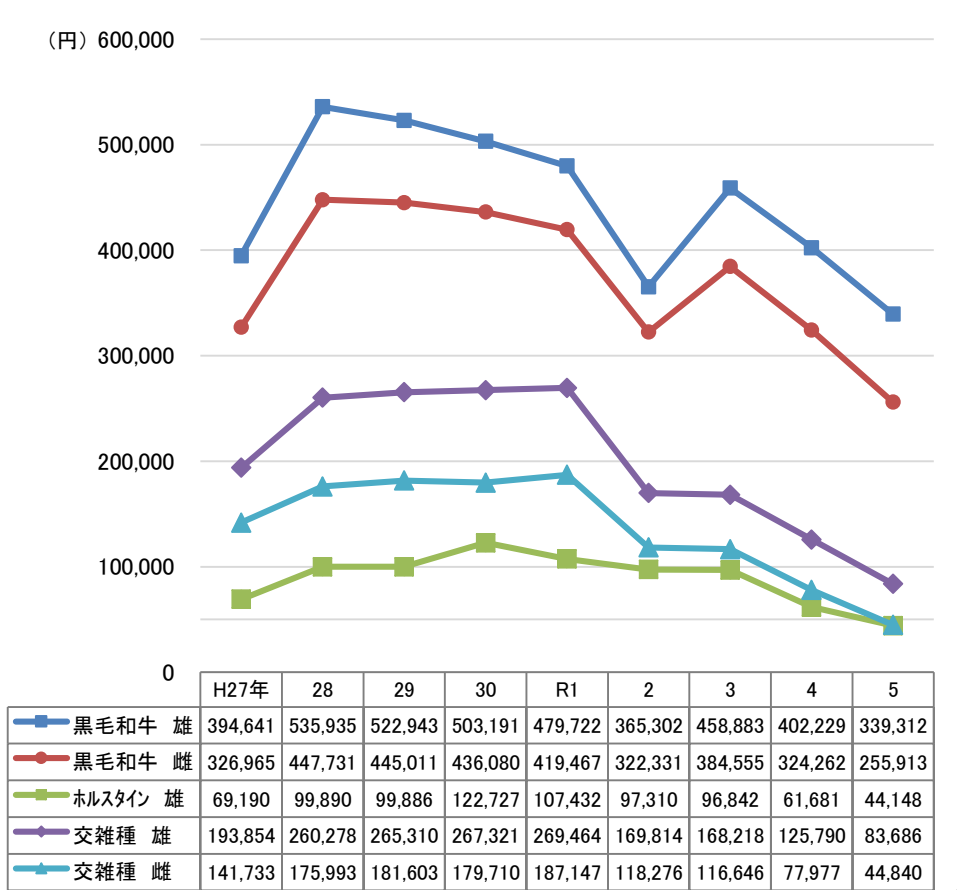
資料：北海道農政部調べ（ホクレン「乳牛市場成績」(6市場)＋ホルスタイン農協1市場＋家畜商協2市場の平均)

■廃用牛販売価格の推移



資料：北海道農政部調べ（ホクレン「乳牛市場成績」(5市場)＋家畜商協3市場の平均)

■初生牛販売価格の推移



資料：北海道農政部調べ（道内11市場の平均)

# 5 酪農の飼養形態

- 北海道の酪農の飼養形態は、家族経営体が9割強、大規模法人などの組織経営体が1割弱と、小規模農家が大宗を占める。
- 経営体のうち、繋ぎ飼いが全生乳出荷戸数の60%程度を占め、フリーストールが30%程度、放牧主体が5～10%を占める。
- 畜産クラスター事業等を活用し、フリーストールの整備、搾乳ロボットの導入等の規模拡大の取組が進展。

飼養形態	家族経営体			組織経営体		備考
	放牧主体	繋ぎ飼い	フリーストール	うち搾乳ロボット	組織経営体	
	 (5月～10月)					
1戸(経営体)当たり 経産牛飼養頭数(※)	～約80頭/戸	～約80頭/戸	約100頭/戸～	約60～120頭/戸	約250頭/戸～	
1頭当たり平均乳量(※)	6,000～8,000kg/年	8,000kg/年	9,000～10,000kg/年	9,500～10,000kg/年	9,000kg～/年	・経営体間の差異が大きい ・道内平均:8,972kg/頭 (R4年度)
飼養形態割合	5～10%程度	60%程度	30%程度	10%程度	6～7%程度	生乳出荷戸数計4,822戸 (R5. 2. 1)
メリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・牛が自ら採食するため、飼養管理、飼料生産の省力化</li> <li>・購入飼料費の削減などによる低コスト生産が可能</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・飼料給与や繁殖確認等の個体管理が容易</li> <li>・牛1頭当たりの施設面積が小さくて済む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・搾乳や給餌の労力が減少、牛のストレスも軽減</li> <li>・発情行動がわかりやすくなる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・搾乳作業の実働が極めて少なくなり、労働時間が短縮</li> <li>・搾乳回数の増加(3回/日程度)により、乳量が増加</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出役日や勤務時間の調整により、休日取得や労働時間の短縮が可能</li> </ul>	
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1頭当たりの乳量が他の飼養形態と比較して少なくなる可能性。</li> <li>・搾乳施設の周辺に、まとまって整備された放牧地が必要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人が動くことが必要であり、搾乳や給餌に労力がかかる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設備投資額が大きくなる</li> <li>・繋ぎ飼いのような個体管理が困難(群管理)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設備投資額が大きくなる</li> <li>・乳用牛をロボットに馴れさせることが必要</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・設備投資額が極めて大</li> <li>・経営主による労務管理能力の向上が必須</li> </ul>	

※ 1戸(経営体)当たり経産牛飼養頭数及び1頭当たり平均乳量は目安。